

「墓場からの解放」

—マタイによる福音書講解説教 41—

詩篇 第28篇 6節～9節
マタイによる福音書 第8章 28節～34節

説教 岡村 恒牧師

主イエス・キリストと共にガリラヤ湖を渡ってきた弟子たちは大きな疑問を抱いていました。「このかたはどういう人なのだろう。」(マタイによる福音書 第8章27節) これまで、主イエスが大勢の群衆にお語りになる言葉を聞いてきました。絶望していた病人や、神に捨てられて滅んでいくしかないと思っていた人が、次々と癒される様子を間近で目にしてきました。普通なら、いよいよ勢力が拡大していくことを計画し、実行していくような場面です。

しかし主イエスは、弟子たちと一緒に船に乗り、ガリラヤ湖西岸から寂しい東岸に渡っていかれました。すると突然嵐になりました。弟子たちの中にはベテランの漁師たちがいましたが、この突風はあまりに異常で、絶望的な状況でした。主イエスは彼らに言われました、「なぜこわがるのか、信仰の薄い者たちよ」。(26節)、そう言われてから、嵐を静めてしまわれたのです。

主イエスが父なる神と等しい力をお持ちであることを目の当たりにしながら、弟子たちはただ驚いています。「このかたはどういう人なのだろう。」これは、私たち人間が問い続けてきた問いです。聖書はこの問いに答えます。神とはどういうお方かを知りたいと願う私たちのために、主イエスの誕生と十字架の死、復活という出来事全体を通して、神はお答え下さいました。

弟子たちは、この問いを抱えたままで上陸しました。そこにいた人の中には、大量の豚を飼っている人がいました。ユダヤ人にとって豚は汚れた動物ですから、普通のユダヤ人であれば、ガダラ人の地に入って豚を飼うような人々と関わりたくないはずです。しかも、主イエスと弟子たちが着くとすぐに、悪霊に取り憑かれたふたりの者が、墓場から出てきて主イエスに出会います。

「神の子よ、あなたはわたしどもとなんの係わりがあるのです。まだその時ではないのに、ここにきて、わたしどもを苦しめるのですか」。

(29節) この悪霊は主イエスがどなたかを知っていました。他の誰もまだ知らない時に、悪霊は本当のことを知っていました。彼らは終わりの日に『裁き主』が来て、一切の悪霊を深い滅びに落とすことを知っていました。聖書にはそのことが繰り返し書かれているからです。そして主イエスを見て、叫ばずにはいられなかったのです。

悪霊にとりつかれている人間、つまり自分のしたいことができず、したくないことをしてしまう。私たちは誰もが生まれながらにして罪人であり、死んで裁かれ、葬られるべき存在です。「義人はいない、ひとりもない」(ローマ人への手紙 第3章10節)と聖書は宣言しています。

主イエスは、この悪霊の言葉を弟子たちに聴かせるために、ここに来られたように見えます。この時、弟子たちはこの言葉をすぐに信じることはできませんでしたが、記憶の中に、「神の子よ」という悪霊たちの叫び声が刻みつけられたと思います。やがて主イエスが天に引き上げられた後、聖霊をお送りくださった時、弟子たちの心の目が開かれました。悪霊たちの叫び声を鮮明に思い出して、確かに主イエスは救い主だ、と自分たちの口で告白するようになるのです。

主イエスは、神の子、救い主である。私たちは礼拝のたびにそう告白しています。本当に神がおられ、この世界を創り支配しておられるなら、なぜこんな悲しみが起こるのか。神よ、あなたはどのようなお方なのですか。墓場に立って、繰り返しそう問いかけるのは私たちです。主イエスは、そのような私たちのことを誰よりもご存知です。だからこそ、私たちの救い主として、この地上に来て下さいました。

どんな場所に置かれていても、主イエスを神のひとり子、救い主と信じて洗礼を受ける人は、自分の人生、命が、墓場で終わってしまわないことを知っています。あの朝、主イエスが墓から引き上げられ、今も生きておられる以上、私たちも、主によって死から、滅びの中から引き上げられ、神の国で永遠の命を持つ者として、神を誉め称えるようになる。そのことを世界中で信仰者は確認し、喜んでいます。

主イエスは、私たちが墓場に縛られたままで滅びることをお許しになりません。今日、私たちがここに招き集められたのは、そこから解放されて生きるためです。墓場から喜んで歩み出すためです。主イエスは、今も生きて働き、私たちのために執り成し、終わりの日、御元に迎え入れる為の準備をしておられる。主イエスを誉め称える祈りを祈り、解放された喜びを共に喜び合いながら、1日1日主を賛美して、踊るように歩みたいと思います。

(記 説教要約奉仕者)